

現代文・古文・漢文の連携を図る

(三年次計画の二年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鈴木 信好・須藤 敬
関口 隆一・平田 知之・福田
鹽谷 健

現代文・古文・漢文の連携を図る

(三年次計画の二年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鈴木 信好・須藤 敬
関口 隆一・平田 知之・福田 孝
鹽谷 健

現代文・古文・漢文の連携を図る

(三年次計画の二年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鈴木 信好

須藤 敬・関口 隆一

平田 知之・福田 孝

鹽谷 健

一 はじめに

本校国語科では昨年より三年間にわたって「現代文・古文・漢文の連携を図る」という主題で研究に取り組むことにした。本稿ではその第二年度として、そのような主題を設定した経緯と、さらに主題を踏まえた試行的実践例とを報告したいと思う。

二 主題設定の理由

主題を設定した第一の理由は、授業時間数の減少である。本校国語科では昨年度まで六年間にわたって「中・高六ヶ年を見通した古典の教材編成」という主題で研究を実施してきた。そこではまず古典学習についての意識調査を行い、十年前の調査と比較した結果、生徒の文法力の低下、古典全般に対する興味・関心の減退が明らかになった。

また古典学習の前提となる素養調査を「住居・服飾の名称」「いろはガルト」「小倉百人一首」を例にとつて行い、生徒が古典に関して共通の知識の基盤を持ち得ていない現状を指摘した。

それらの結果を踏まえ、中学段階では絵巻物を教材に用い、生徒に古典の世界へ親近感を持たせ、減退傾向にある古典への興味・関心を喚起する教材編成を提示した。高校段階では季節感を主題にした単元学習を組み、生徒から失われつつある古典の世界の伝統を理解させるように試みた。

最後に、その際のカリキュラム編成の留意点として以下の三点を掲げた。

第一に、これまでのような教科書に依存するだけの授業では古典の授業を成立させることが難しいこと。教科書教材は有名作品に偏りがちであり、とられる文章も短いものが多く、相互の関連づけに乏しく、そのため、授業者の工夫なしには、生徒の興味を引く授業が成立させにくいと考えられるのである。

第二に、古典教育には修養が必要であること。伝統的な古典の感受性を教え導くためには、授業時数の減少もあつて、生徒主体の授業を実施して行く余裕が無く、場面に応じて暗誦などを行う必要を感じている。

第三に、教材の系統性を考慮して、効率よく編成する必要があること。本校の高校一年次では古文の授業が週一時間しかないことを踏まえて、語法や内容をよく吟味した教材の精選が今後必要である。(注1)

以上に抄録した研究プロジェクトで常に底流にはらんでいる実際的な問題は、授業時数の減少である。上に掲げた三つの留意点はすべてその問題に関わり合っている。教科書教材が有名作品に偏り、短い文章が多いのもそのためであるし、実際、「国語Ⅱ」が準必修でなくなつてから、旧「国語Ⅱ」と「古典」の教材が「古典Ⅰ」へ集約されてバラエティに乏しくなつた印象があるし、次期指導要領で「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」が「古典」へ統合されて、その傾向がさらに加速するのではないかと危惧している。生徒主体

の授業よりも一斉の暗誦指導が効果を上げるのも、教材の効率的な編成が求められるのも、授業時数が減少している問題に大いに関係している。

本校では高校生のカリキュラムで古典に十分時間を割くことが難しい実態を踏まえて、中高一貫教育のメリットを生かし、中学生に意識的に多く古典を読ませている。しかし、本年度に発表される次期学習指導要領では、中学の国語の時間は現状より週一時間程度減少することは確定的で、今後中学生に古典の授業時間を多く割くことは難しいものと思われる。

このような状況下では、「現代文」「古文」「漢文」それぞれがバラバラのカリキュラムを立てていたのでは効率が悪い。本校ではそれぞれ授業を専門の教諭が担当し、各人が用意した教材を国語教科会で集約して年間指導計画を立てていたが、今後は同一学年を担当する複数科目の教諭が相互の教材の内容に踏み込んで、教材の連携をはかり、より効率的な指導計画を立てられるように、教材編成をし直す必要があると考えられるのである。

主題設定の第二の理由は、新学習指導要領の目玉である総合化への対応である。

子どもたちに「生きる力」をはぐくむために、問題解決能力を高める、横断的・総合的指導を推進して行く必要性は高まっている。新学習指導要領では、各教科の教育内容を厳選することによって一定のまとまった時間を生み出し、「総合的な学習の時間」を中学・高校ともに設けることとされている。総合的な学習活動を実現させるためにより必要なのは、やはり国語力である。それは単に各教科の学習に用いるのが日本語であるということではなく、膨大な情報の中から必要なものを取捨選択し、再構成し、発信するという総合学習を行うために必要な力が、国語の学習を通して高めて行く。「読む」「聞く」「書く」「話す」という四つの力であるからであり、これらの力ほどりもなおさず「生きる力」そのものにつながるものだからである。従って、国語の授業の中でも各教材を孤立させるこ

となく、連携し、総合的な学習に必要な国語力を高めるための工夫をしなければならぬ。

三 現代文・古文・漢文の連携を図る上での基本的な考え方

昭和五十七年度より実施された学習指導要領で、それまでの「現代国語」「古典Ⅰ甲」「または「古典Ⅰ乙」」が「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」に再編成され、現代文と古文・漢文が総合された科目が誕生し、一人の教師が各教材を総合的に扱うことが可能になった。実際、それぞれの単元ごとに現代分野、古典分野双方にわたる教材が配置され、総合化の理想に燃えた教科書もいくつか出版された。しかし、学校教育現場では、相変わらず「現国」と「古典」を別々の教師が担当し、教材も両方で縦割り分担して用いられることが多かった。平成に入ってから、現代文・古典が入り乱れて編集されている教科書が存在感をなくし、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」に現代文と古典が分冊になっている教科書が編集され、一定数採用されていることは、その何よりの証左である。なぜ「現代文」と「古典」の総合化が浸透しなかったのかは、詳細な分析が必要であるが、ここではそれは問わない。ただ、上述のような、ある単元のもとに「現代文」と「古典」の各教材や、いわゆる「現古融合文」を配置するような方法では、旧来「現代文」「古文」「漢文」が抱えていた独自性を発揮できず、特に入門期などにおいて指導の焦点がぼやけがちであったことも否めないと考えられる。そこで今回の研究プロジェクトではそのような形の「融合」は行わないこととした。「現代文」「古文」「漢文」が従来の授業の枠を持ち、それぞれの独自性を主張しながら、相互の教材の関連をはかり、教材の精選、授業時間数の減少にも対応しながら、指導の質を落とさないようにする教材や指導方法の研究を行うこととした。

国語科における「総合学習」の形態を、神戸大の野上教授は次のように分類している。(注2)

(1) 教科「国語」の中で、担当教師が教科「国語」の時間の中で行う

(2) 「国語」の教師が、他の教科の教師と総合的な学習について検討し、担当するそれぞれの教科学習の中で、役割分担して行う

(3) 教科学習とは別枠の時間で総合的な学習を行うが、「国語」の学習でも総合的な学習と関連する学習活動を展開する

(4) 教科学習とは別枠の時間で総合的な学習課題を扱い、教科「国語」の時間との関連は持たせない。

今回私たちは、(1)の形態の学習指導を行うわけだが、その際、一人の「現代文」(もしくは「古文」「漢文」)教諭が、自身の担当科目を中心に据えて、他科目との連携をはかり、総合的な指導を行う方法と、複数の「現代文」「古文」「漢文」担当教師が、それぞれの扱う教材を連携して編成し、それぞれの授業で役割分担して指導する方法がある。後者は上記(2)の分類に近い形かもしれない。昨年の実践例はその両者の形を試みているが、最終的には後者のような形の指導・教材編成を目指している。次頁以降の実践例は、平成十年(99)年十一月二十日の本校第二十五回教育研究会において実施されたものである。

四 試行的授業の実践例

今年度は「現代文・古文・漢文の連携を図る」の研究主題より、歴史教材を取り上げて試行的に実践してみることとした。

本校第二十五回教育研究会では、二校時分の公開授業の中、一校時分をテーマ学習に振り分けたので教科授業は漢文のみとなった。以下に、歴史教材設定の事由と公開授業の実践報告との外、現代文・古文の担当教諭の「現代文・古文・漢文の連携を図る」に関する報告を示すことにする。

(一) 漢文公開授業

本時の前其の第一時に、「史記」講讀に先立ち以下の講義をしてある。一般に高等學校の教科書に収載する漢文は、「論語」「孟子」「老子」「莊子」「韓非子」などの思想。「詩經」、陶淵明、李杜、杜牧、白居易、韓愈などの文學。そして「史記」の代表する歴史の三分野である。このことは漢籍の四部分類に對應する。四部分類は、魏に始まり清に至るまで續いた書籍の四つの區分である。思想文學歴史では三分野であるが、思想の中、儒家思想を特別なものとなして、儒家思想と諸子思想とに二分して、前者を經、後者を子とするのが四部分類である。即ち順に經部(儒家思想書)史(史書)子(諸子思想書)集(文學作品)の四部となる。全漢籍を僅か四部に分類して、其の第二位に史部を立ててあることよりしても、史書は重要であり、「史記」讀解には充分な學習意義がある。

本時は、第一に、全漢籍を僅か四部に分類して、其の第二位に史部を立ててあることより、何如に史書が重要であるかを確認する。第二に、史部の何如なるものを講ずる。第三に、「史記」より古い史書を讀解する。第四に、正史と關連付けて史部における「史記」の位置を講ずる。第五に「史記」の體裁特徴などを講ずる。以下に詳述する。ここまでが後載の公開授業教材である。

何如に歴史記述を重んじて來たかの確認の一例として、史官なる存在を擧げる。史官は帝王の言動事績を記録したり、歴史を編纂したりする役人であり、司馬遷も亦其の一人であつた。帝王の言動、公室諸國の重大事件を記録し歴史を編纂するのは、往を彰らかにして來を考へ、國君や臣子の鑑とせんが爲である。勸善懲惡の意味を持つ。

史部の中でも正史に觸れ、歴史記述の意圖を明らかにする。正史は現王朝が前王朝の史官の記録を基にして編纂するものである。

「史記」より古い史書として「春秋左氏傳」を取り上げる理由は、第一にテクスト「中国思想文學通史」にあるこ

と。第二に孔子が編纂したとされることから歴史記述の意圖が確認し易いこと。第三に漢文の特徴の一つである注(傳)であること。注については既に「中國名文選」で講讀してゐる。

「史記」は正史の筆頭に位置する史書である。「史記」までの史書と比較して最大の特徴は、一人づつを取り上げて記述する紀傳體にある。正史は以下全て紀傳體となる。帝王の本紀、諸侯などの世家、そして列傳。列傳の中には刺客まで含んであることより、司馬遷の「史記」記述の意思が讀み取れる。

「史記」は其の難易度、語法句法からは標準的な漢文であり、漢文讀解の實力養成の點からも好個の教材である。

(二) 實踐報告

研究主題「現代文、古文、漢文の連携を図る」の實踐にあつて、今年度はどのやうな共通點から設定するかを次のやうに考へた。前述「三 現代文・古文・漢文の連携を図る」上の基本的な考え方」にのべてある「そこで今回の研究プロジェクトではそのやうな形の「融合」は行わないこととした。『現代文』『古文』『漢文』が従来の授業の枠を持ち、それぞれの独自性を主張しながら、相互の教材の関連をはかり、教材の精選、授業時間数の減少にも対応しながら、指導の質を落とさないやうにする教材や指導方法の研究を行うこととした」ことから、通常に扱ふ教材の中から共通點を見出して實踐してみることとした。其の時に教材の固定度の高い漢文科目から見て詩歌と歴史とが候補に上り、歴史教材を取り上げることとした。詩歌については後述する。

漢文學の觀點からみれば、史書、其の代表的作品「史記」を講讀するのは常識と言つてもよい。それは必然的に歴史記述或いは「史記」の意義意圖に觸れざるを得ない。「融合」に重きを置かず「独自性を主張しながら」であれば、漢文科目としては「史記」を「史記」として讀んで、

古文科目は「大鏡」を「大鏡」として讀んで、現代文は「であることとする」と「現代日本の開化」をそれぞれとして讀みながら、歴史や歴史記述について三科目それぞれ立場から講じ、其の學習の意義、講義の意圖をまとめて漢文の授業の中で確認することとした。

「史記」を讀む時には、一般にこれを歴史書として讀むのではなく、文學書として讀むものであらう。此のことは「大鏡」にも謂へる。古文科目からは歴史物と文學作品との關係についても言及することとした。

今年度の研究主題「現代文・古文・漢文の連携を図る」歴史教材の一環として、結果的に現代文・古文・漢文の連携に關する授業を行つてゐる。唐詩には細かな規則、押韻平仄があり、それを理解させる爲に、作詩を最終目標として先づは生徒自身に七言句一句以上を作句させてゐる。それは四行詩を現代日本で作り、其の中の一行以上を平仄を合はせて七言句にさせるもので、漢詩風にはどのやうな表現になるのかを添削して示し、唐詩鑑賞の一助とする。律詩學習においては絶句を作句させてゐる。又、唐詩鑑賞の最終段階では絶句を一首選ばせ、リズムを有する日本語に翻譯させる。或いは、短歌俳句に譯すも可としてゐる。

國語 古典Ⅰ 漢文「史記」

【日時】平成十年十一月二十日金曜日 第二校時(自午後二時五分 至二時五十五分)

【教場】本校七号館オープンスペース

【對象】本校高等學校二年一組 男子四十一名

【擔當】本校國語科教官(古典漢文擔當) 鹽谷^{しおのや}健^{けん}

【研究題目】現代文・古文・漢文の授業の連携を圖る

【年間計劃】三年間を訓讀基礎、文學、歴史、思想とに大別して進める。一二年次は必修科目、三年次は自由選擇科目 一年次 漢和辭典 訓讀基礎 文學作品(テキスト)「中國名文選」「唐詩新選」より 作句)

二年次 文學(引き續き)「中國名文選」「唐詩新選」より 作對句) 歴史書(テキスト)「中国思想文学通史」より「春秋左氏傳」「史記」他)

三年次 思想書(テキスト)「中国思想文学通史」より他)

【授業展開】全九時間

第一時 右の如く、三年間の授業を訓讀基礎、文學、歴史、思想として進める中で、訓讀基礎、文學鑑賞を終へた今時、歴史に進むに當たり、其の價値を理解する爲に漢文における其の位置を示すことを目的として傳統的な四部分類を示す。併せて四庫全書に觸れる。

第二時(本時) 史部、史書について。『春秋左氏傳』襄公二十五年「讀解 古代の歴史書の例として。冒頭の「項 籍 者」の記述の意味と受身の構造とを中心にして。

第三時 『史記』項羽本紀「讀解 歴史背景と使役の構造とを中心にして。

第四時 『史記』項羽本紀「讀解 鴻門の會を中心にして。

第五時 『史記』項羽本紀「讀解 四面楚歌を中心にして。

第六時 『史記』項羽本紀「讀解 天命を中心にして。

第七時 『史記』刺客列傳「讀解 司馬遷の項羽評價を中心にして。

第八時 『史記』太史公自序「讀解 荆刺を中心にして。

第九時 開化、「大鏡」との連携とを中心にして。

【本時】漢籍四部分類（經史子集）には獨立して史部を立てる。先づはこの點から漢文における歴史記述の重要性に觸れ、又其の作品數の多さを示す。次に多くある史書の中から最も古い作品の一つとして、テクスト「中国思想文学通史」に載せる「春秋左氏傳」の部分を讀む。そして最高の史書である「史記」について、正史の筆頭であることと、其の著者司馬遷、其の體裁などを示し、項羽本紀を讀み始める。

【教材】『史記』項羽本紀 冒頭、鴻門の會、四面楚歌、項羽の最期、末尾。『史記』太史公自序

『史記』項羽本紀 冒頭 「史記會注考證」より引用。教科書明治書院「精選 古典Ⅰ」

『史記』項羽本紀 鴻門の會 同右

『史記』項羽本紀 四面楚歌 「中国思想文学通史」より引用

『史記』項羽本紀 末尾 「史記會注考證」より引用

『史記』項羽本紀 補足部分 同右

『史記』太史公自序 抜粹 同右

※関連作品 現代文「であることとすること」「現代日本の開化」 古文「大鏡」

【参考文献】瀧川龜太郎編著「史記會注考證」は東方文化学院東京研究所發行

『史記』本紀 吉田賢抗 明治書院新釈漢文体系

『史記』列傳 水澤利忠 明治書院新釈漢文体系

長澤規矩也著作集 第一卷 汲古書院

支那史學史 2 内藤湖南 平凡社東洋文庫

『史記』貝塚茂樹 中央公論新書

『司馬遷』貝塚茂樹 中央公論社世界の名著

『史記』の人物列伝 狩野直禎 岩波文庫

『史記の世界』増井経夫 NHKブックス

『日本外史』頼山陽 岩波文庫

『歴史』ヘロドトス 岩波文庫 他

四部分類

一 嘗て傳統的な漢籍の分類法。左の如き序有り。

- (1) 經部 經とは手本とすべき書物。漢文では其の基準は儒教。即ち四書五經(「論語」「孟子」「大學」「中庸」「易」「詩」「書」「禮」「春秋」)ほか儒教の正典十類。
- (2) 史部 史書(歴史書)など十六類。
- (3) 子部 諸子(老子、墨子、韓非子など)、藝術書、動植物學書、醫書、小説など十四類。
- (4) 集部 詩文集など五類。

四庫全書

一 清の乾隆三十七年(一七七二)の勅命に因り十年を費やして成る。

二 七組作製し宮中及び各地の離宮や學者閱覽の爲に書庫を建てて收藏する。

- (1) 文淵閣 紫禁城(不帶出)
- (2) 文源閣 北京郊外圓明園離宮(一六八〇)に英佛軍の北京攻略に滅す。或いは四散か。日本に數冊)
- (3) 文溯閣 奉天(清室發祥の地。日本に賣らんとしたる所か)
- (4) 文津閣 避暑地熱河の行宮
- (5) 文匯閣 揚州大觀堂(長髮賊に敗る)
- (6) 文宗閣 鎮江鐘山寺(同右)

(7) 文瀾閣 散佚の後、補寫して杭州聖因寺行宮

四庫全書總目提要

- 一 乾隆四十七年(一七八二)の勅命に因り成立。四庫全書中の各書の冒頭に付したる提要を総合したるもの。
- 二 提要とは著者の小傳、書の沿革、内容の大略、評論を要約したる解題。
- 三 史部正史類「史記」の提要の冒頭を示す。テキスト(「中国思想文学通史」百六十五頁に別書の提要有り)。

史部

- 一 史書の外、地理、官職、制度などの書物。
- 二 史書の類別を示す。正史、編年、紀事本末、別史、雜史、詔令、奏議、傳記、史鈔、載記、時令、地理、職官、政書、目錄、史評の十六類。
- 三 正史は「史記」に始まり、「漢書」「後漢書」――「唐書」――「清史稿」まで有つて、一般に全二十四史。

史書(「春秋左氏傳」)

- 一 「春秋」と「左氏傳」との合本。「春秋」は孔子が編纂したとする魯國の年代記。「左氏傳」は左邱明が「春秋」に付したる注釋。この注釋を傳と謂ふ。晉の時代に兩書を合はせて「春秋左氏傳」と爲し、略して「左傳」と謂ふ。テキスト四十二(「中国思想文学通史」頁參照)。
- 二 夏目漱石の「文學論」にも引用有り。
- 三 テキスト四十四頁に引用する「春秋左氏傳」の語釋、訓點文、解説文を付す。

〈語釋〉

〔經〕 乙亥—十七日。 齊—國名。 崔杼—人名。〔傳〕には崔子と記す。 弑—下の者が上の者を殺す。 君—主君。〔傳〕には「公」と記し、「解説文」には莊公と記す。 光—君の名。

〔傳〕 莒—國名。 現在山東省に莒縣有り。 莒子—莒の君。 朝—來朝する。

爲且于之役—且于といふ地における齊との戦の和睦のために。 甲戌—十六日。 饗—もてなす。

墉—「うツ。」打つ。 楹—「はしら。」柱。 賈擘—人名。 衆從者—伴の人々。 甲—兵卒。

與—起に同じ。 立ち上がる。 干楹—夜回りをする。 淫者—暗に公(莊公、光)を指す。

不視事—和睦のことに關與しなかつた。 盟—盟約。 二命—主君たる崔杼の外の命令。

牆—「かき。」垣根。

〈訓點文〉

〔經〕 二十有五年、夏五月、乙亥、齊崔杼弑其君光。

〔傳〕 二十五年、夏五月、莒爲且于之役、故莒子朝于齊。甲戌、饗諸北。郭、崔子稱疾、不視事。乙亥、公問崔子、遂從姜氏。入于室、與崔子

自側戶出。公墉而歌。侍人賈擘止衆從者、而入閉門。甲興。公

登臺而請弗許。請盟。弗許。請自刃於廟。弗許。皆曰君之臣杼疾

病、不能聽命。近於宮、陪臣干楹有淫者。不知二命。公踰牆。又

射之。中股。反隊。遂弑之。

〈解説文〉 直接に右の「傳」の譯文ではなく、「史記」齊太公世家「中の同事件の記述を基にする文章である

史記

一 正史の筆頭。

二 紀傳体 紀は記す。傳は傳記、或いは注釋としての傳（「左氏傳」の傳。）

三 一百三十卷 五十二萬六千五百字。

- (1) 本紀 十二卷 帝王の事績
- (2) 世家 三十卷 諸侯の事績
- (3) 列傳 七十卷 個人の傳記

さて、齊の棠邑（山東）の大夫の妻は美貌であつた。棠の大夫が死ぬと、崔杼は彼女をわがものにして、妻とした。ところが莊公がこの女と密通し、しばしば崔氏の家に通い、崔杼の冠を勝手に人にやつたりしたので、崔杼は腹を立てた。彼は晉を討つのにこつけ、かえつて晉と通謀して齊を討とうとしたが機會を得られなかつた。

莊公はかつて宦官の賈擧を答打つたことがある。賈擧はその後も莊公に仕えていたが、崔杼のために公の隙を窺つて怨みを報じようとした。莊公六年の五月、莒（山東）の君が齊の國に來朝し、齊では莒君をもてなす饗宴が開かれた。崔杼は病と稱してこれには出席しなかつた。莊公は翌日崔杼の見舞いに出かけ、杼の妻のそばに行こうとした。彼女は室の中に入り、崔杼とともに戸を閉めて出ようとしなかつた。そこで公は柱を抱きかかえて歌をうたつた。彼女を呼び出すためであるとも、彼女に欺かれたのを知つて、後悔してうたつたともいわれる。

このとき宦官の賈擧は莊公の從者が杼の屋敷内に入るのを邪魔しながら、自分は屋敷の中に入り、門を閉めてしまつた。崔杼の家來が武器を持つて、中から起ち上がった。莊公は臺に登つて釋放してくれと願つたが、彼らは許さなかつた。盟を立てようと請うたが許さなかつた。宮中に歸り、先祖の廟のところでは自殺させてくれと願つたが許さなかつた。そして口々に言つた。

「あなたの臣の杼は病氣であつて、あなたの御命令を聞きことができせん。ここは宮殿に近いのです。主人崔杼の妻を寢取ろうとしてやつてきた者は、莊公の名をかたつているのかも知れせん。私たちは陪臣は主人の崔杼から取り押さえるよう言いつかつてやつてきたのです。ほかの命令に従うわけにはいかな

い」と言つた。
莊公は牆を踰えて逃げようとしたが、崔杼の家來の射た矢が股に中り牆から墜ち、殺されてしまつた。
（『史記』の人物列傳より）

(4) 表 十卷 年表

(5) 書 八卷 文物制度史

司馬遷

- 一 前漢の人。姓が司馬(複姓)名が遷、字は子長。
- 二 少き時より「春秋左氏傳」「國語」「戰國策」などの史書、其の外にも善く書を閲し、又諸國を遍歴して故事に通ず。
- 三 三十六の時父司馬談に背かる。父の後を受け、太史令となる。太史とは天文曆算を司り、兼ねて國の歴史を司る。
- 四 令は長官なるも高級官僚には非ず。父より修史の遺命を受く。
- 四 四十七歳、朋友李陵の爲、上奏して誣告罪に問はれ死刑を宣せらる。修史の大業を遂ぐべく身を宦官に落として命を繋ぐ。即ち官刑に処さる。
- 五 約二十年の歳月をかけて初の通史たる「史記」を完成す。当時紙は無く木簡に記す。

史記會注考證

- 一 會注とは先人の注釋を集むの意。考證とは自注の稱にして、其の人は我が國明治時代、瀧川龜太郎先生なり。

(三) 現代国語分野からの報告

高校二年生における、現代文分野と漢文分野の連携について、現代文の側から、以下に記すことにする。

漢文「史記」の授業との関連で、歴史記述にかかわる文章として、丸山真男「『である』ことと『する』こと」及び夏目漱石「現代日本の開化」を取り上げた。

両者とも、現代文分野では優れた文章としてしばしば教材に挙げられている。丸山の文章は、政治学者としての彼の思想を、比較的わかりやすく述べている。講演記録に手を入れた文章で、岩波新書として現在でも広く読まれている。漱石の文章は、これも有名な講演であり、「私の個人主義」などとともに、彼の代表的な評論の一つである。

高等学校において、現代文が古文、漢文と分けられているのは、言語的な相違によるものだが、現代文を成立させる現代語とは何か、あるいは「現代」とは何かという点に関心が向けば、自ずと歴史的な意識につながっていく。その意味で、現代文の教材は、常に「現代」とは何かという問いに関連しており、その中でも上記の二つの教材は、主観的にこの問題を扱っているものと言える。

これらの教材を用いて行った授業そのものについては、普通に行われるときとほぼ変わらないので詳細は省略するが、歴史との関わりについて、少し触れておく。

丸山の文章では、近代民主主義を説明するために前近代の例として江戸時代を挙げ、それから明治へと社会が変化していく様を捉えている。その中で、現代を江戸と比較することで相対的に捉えらるとともに、時代の変容についての見方が示されていく。

漱石の文章では、有名な「内発的」「外発的」という用語を用いて、日本の近代化の実体についてまさにこの時代を生きた者としての「悲観的結論」を導き出していく。

高校二年生ともなれば、年齢相応の社会認識が育ちつつある時期であり、また科目としての世界史の受講など、歴史について彼らなりの理解が始まろうとする時期である。

それは、言い換えれば彼らの現実、現代という時代を相対化する眼が生まれつつあると言うことでもある。

ただ、それはともすれば単なる身近な実感から離れない現代と、知識化された断片としての過去に分離し、しかもますます不透明さを増すかに見える未来への展望と相俟って生きた時代認識につながっていかないおそれを多分に持っている。そのような生徒に対して、様々な文章の読解を通じて、過去を自分とは遠い存在に感じるのはなく、現代とのつながりにおいて捉えようとする生きた人間の思考に触れさせることは、きわめて重要なことであろう。

現代文の側にとつて古文あるいは漢文は、現代とは異なる視座から描かれた文章を扱うジャンルであることから、常に「現代」とは何かを逆照射する働きを持つものと考えられる。そして、その意味で、「連携」は今回はテーマとして意識的に取り上げられてはいるが、実際にはそれと意識するまでもなく常に行われている、あるいは行われるべきことではないかと思われる。

(四) 古文分野からの報告

高校二年生における、現代文分野と漢文分野の連携について、古文の側から、以下に記すことにする。

古文「史記」の授業との関連で、歴史記述にかかわる文章として、『大鏡』と『榮花物語』を取り上げた。これらの歴史物語が、果たして史書としての性質を持つのか、それとも物語文学としての性格を強くするのか、古来諸家の説が分かれるところである。『大鏡』は大臣の列伝を中心とする紀伝体を取り、『史記』の構成に倣ったものであると一応認められる。しかし、雲林院の善提講の待ち時間に二人の古老が歴史を語るという対話形式をとっている点には、『史記』との大きな違いである。教材としたのは、『花山院の出家』である。花山院が剃髪を済ませた後、粟田殿が本心を表した場面の「あはれにかなしきことなりな」などという終助詞の用い方は、明らかに聴衆に相槌を

求める物言いとなっており、大鏡は、単なる対話体というだけでなく、説話としての性質を持つていることを生徒に読みとらせることは容易である。花山院の出家を兼家らの策謀という側面を強調して記述する『大鏡』に対して、『栄花物語』では、愛する女性を失った花山帝の悲しみ、花山帝出家後の周囲の狼狽などを、情意を尽くして語り、より物語文学としての性格を強くしている。授業ではこのあたりの両書の違いを生徒に意識させることを、眼目とした。

ところで、本校が高三の授業で扱う『源氏物語』の「蛩」の巻には、「日本紀などはただかたそぼぞかし」という発言があり、正史では生きた人間の機微は十分語り尽くせない恨みがあると述べられている。この源氏物語の指摘に対する一つの解答として、『栄花物語』のような歴史物語が存在するわけである。このあたりの考え方は、歴史の授業ではなく古典の授業として四鏡や栄花物語などを扱う上で、重要な観点であろう。古文の授業の側では、以上のような問題を一学期に扱って、二学期に正史を扱う漢文分野との連携を図った。

五 まとめと今後の展望

本年は以上のような形で、漢文分野と古文分野の連携を図る実践を一つ行った。現代文分野との連携については、残念ながら、新たな実践を行えなかった。来年度は、昨年度同様、現代文、古文、それぞれの立場から、「近代意識の成立」などを核として、連携を図る試みを研究実践する予定である。